

明治維新の記憶 — 双六引札「当代十式傑双六」から —

近年、平成30年(2018)の明治維新150年に向けた取り組みが全国的に活発化しています。明治時代以降、明治維新は近代日本の出発点として常に語られ、叙述されてきました。

今回は双六引札「当代十式傑双六」(写真参照・当館蔵)等から明治30年代における明治維新像の一端を明らかにしてみたいと思います。

「当代十式傑双六」は明治39年(1906)に所沢の麻屋呉服店が配った引札(チラシ)です。双六のマスに「当代十式傑」すなわち明治30年代におけるすぐれた12名の人物として①大山巖、②大隈重信、③渋沢栄一、④伊藤博文、⑤井上馨、⑥松方正義、⑦市川團蔵、⑧大倉喜八郎、⑨常陸山、⑩梅ヶ谷、⑪東郷平八郎、⑫竹本摂津大掾を配しています。

「維新の三傑」や「維新の十傑」に比すると薩長藩閥の元老だけでなく歌舞伎役者や力士、義太夫節の太夫も加わりバラエティーに富んだ印象もある反面、やはり耳慣れない「十二傑」。引札と同時代の書物をひもといたところ、雑誌『太陽』の臨時増刊号に「明治十二傑」という言葉を見つけました。

「明治十二傑」は明治32年(1899)に雑誌『太陽』12周年記念と「明治文明の一大記念」として出版された伝記です。凡例によると、「帝国近世の社会各方面に於る進歩の実相を描写する為に」、政治、文学、美術、法律、教育、科学、医術、宗教、軍事、農業、工業、商業の12部門に分け、投票を全国の『太陽』読者に募りました。投票の結果、各部門の第1位となったのが、①伊藤博文、②加藤弘之、③橋本雅邦、④鳩山和夫、⑤福沢諭吉、⑥伊藤圭介、⑦佐藤進、⑧釋雲照律師、⑨西郷従道、⑩伊達邦成、⑪古河市兵衛、⑫渋沢栄一の全12名です。

「当代十式傑双六」がどのような経緯で制作されたのかは不明ですが、同時代に選出された「明治十二傑」と同様、大衆の意向が反映されていたのではないかと推察されます。

最後に、「明治十二傑」のなかから、伊藤博文とともに唯一引札と臨時増刊号のいずれにも選出され

た渋沢栄一の伝記を紹介します。この伝記は、坪谷善四郎による口述筆記で、生誕から明治6年(1893)の大蔵省退官までの経歴をすでに「過去」として話すことに差し支えないとしています。

渋沢は「成程私の初志は、幕府を倒す積りであつて、其の目的は西国の二三強藩の力で貫徹したが、顧りみれば此身は却て幕府の禄を食んで、今は亡国の遺臣である、初志は兎も角も、今は新政府から見れば反対者である」として、大蔵省入省の辞退を考えていたと回顧します。明治時代も30年を過ぎると、このような当時の心情に言及できる土壌が形成されつつあったことが伺えます。

極彩色の引札において、その図柄のモチーフには縁起物が好まれました。同時代人にとって、自由民権運動や日清・日露戦争を経た明治30年代は、明治維新を起点とする、藩閥に限らず多彩な人材を原動力に長足の進歩を呈した明るい時代であったと考えられます。

きたる明治維新150年の節目にはどのような明治維新像が紡がれるのでしょうか。



双六引札「当代十式傑双六」(当館蔵)

(企画担当 林 真美)

歴史と民俗の博物館のIPM(総合的有害生物管理)

当館は12万点を超す資料を所蔵しています。これを今の世代だけで損なうことなく、後世に伝えていくことが、博物館の使命の一つです。

資料を劣化させる要因には、光、空気環境、地震、火災などいろいろあります。そうした劣化要因のうち、虫やカビなどの生物被害を防止するための取り組みがIPM(Integrated Pest Managementの略、総合的有害生物管理)です。

当館は、昭和46年に開館しましたが、昭和40年代以降、当館に限らず、多くの博物館では、定期的に収蔵庫や展示室を大規模に薬剤燻蒸することで、資料を虫やカビの被害から守ってきました。これに使われた薬剤が、臭化メチルと酸化エチレンの混合剤(商品名エキボン)です。

ところが「オゾン層を破壊する物質に関するモントリオール議定書締結国会議」で、臭化メチルがオゾン層を破壊する物質として平成16年末で全廃されることが決まりました。代替薬剤の開発ももちろん進みましたが、これをきっかけとして、地球環境や人体に負荷を与える可能性のある薬剤だけに頼らない、虫やカビの被害から資料を守るためのシステムが必要ではないかとの考えから、受け入れられてきたのがIPMです。

IPMは簡単に表現すると、あらゆる有効な防除手段を合理的に併用して、生物被害の低減を目指して、有害生物の個体数を低減させていくためのシステムです。

当館では、平成13年からIPMの考え方を取り入れた資料保存の取り組みを実施してきました。IPMを実践していくに当たっては、大規模な薬剤燻蒸を定期的に実施していた時とは違い、これだけをやっていれば大丈夫というものはありません。如何して文化財害虫(資料に被害を及ぼす害虫)を資料に近づけないようにするか。如何にして資料をカビの被害から守るか。様々な取り組みを行っています。

いくつか主だった取り組みを御紹介します。

一つには収蔵庫の定期清掃です。当館では月に2回、日を決めて学芸員だけではなく、総務、施設担当の職員も加わり実施しています。収蔵している資料を棚から出し、資料に目を通し、風を通し、虫に

よる被害がないか、カビがないか確認し、塵やほこりを払っています。



IPM作業中の様子

もう一つにはモニタリングです。モニタリングというのは昆虫の生息状況調査のことで、館のあちこちの決まった場所に補虫トラップを置き、一月後に回収して、どこでどのような虫が捕まっているか記録します。これを続けることで、館の弱点を見つけ対処します。

カビへの対処は、温湿度管理です。当館の収蔵庫は平成16年に空調設備を設置しました。設定湿度は年間をとおして57%。設定温度は一番寒い時期には12℃、一番暑い時期には26℃で、年間をとおして緩やかに変動させています。緩やかな変化であれば資料に影響を与えることもほとんどありません。設定温度を変動させることで、小さな機械、少ないエネルギーで良好な状況を作り出しています。

このほかにも様々な取り組みを行っています。収蔵庫や展示室の近くに、草木(特に生花)や食べ物を置かないようにするとか、収蔵庫の扉や搬入口を開けっ放しにしないとか、日頃の些細なことの積み重ねが虫やカビの被害のリスクを減らすことに繋がるからです。

IPMは担当者だけでできるものではありません。博物館にかかわる多くの方々の御理解が、最も大きな力になると思っています。

(企画、学習支援担当 田中正夫)